公益財団法人 中村元東方研究所
東方学院

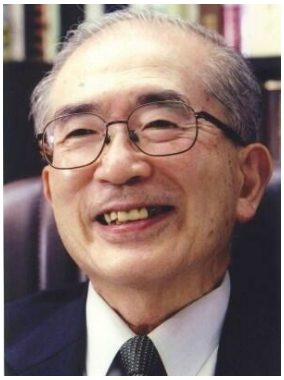
東方だより 第二十二号

【本部 東京本校】
〒101-0021
東京都千代田区外神田2-17-2
延寿お茶の水ビル 4階
TEL 03-3251-4081
FAX 03-3251-4082
URL http://www.toho.or.jp

理事長ご挨拶

「中村元博士生誕一〇〇年記念事業の進展」

前田專學



十月十日は中村元先生のご命日に当たるばかりではなく、インド大使館での中村元東方学術賞授賞式の日でもあり、また松江に創立された中村元記念館の創立一周年の記念の日でもあります。中村元記念館は、世界的なインド哲学・仏教学者であった中村先生のご功績を顕彰する素晴らしい殿堂ではありますが、地味な存在であります。それにもかかわらず開館から十一ヶ月足らずの去る八月二十九日に、入館者一万人達成の式典を松浦正敬松江市長をお迎えして行うことが出来ました。翌三十日には、森清範清水寺貫首とひろさちや先生と小生の三人で記念講演会が、松江市のくにびきメッセで行われました。大変に盛況でした。

ついで日本印度学仏教学会第六十四回学術大会が、先生のご生誕一〇〇年記念の一環として、三十一日と九月一日の二日間にわたって、中村元東方研究所と松江の中村元記念館東洋思想文化研究所との共催で、成功裡に開催されました。開催された場所は、まさしく中村先生のご生誕地、松江市殿町に建っている県民会館で、十部会に分かれて行われました。近くのサンラポーむらくも二階瑞雲での夜の懇親会には、三～四百名の方々が集まり、斎藤明日本印度学仏教学会理事長の挨拶、清水谷善圭中村元記念館東洋思想文化研究所理事長の歓迎の辞、溝口善兵衛島根県知事の祝辞と松浦松江市長の乾杯の音頭で宴はたけなわとなりました。大会二日目の午後には、四つのパネル発表があり、その中の一つにハーンが「神々の国の首都」として世界に紹介した松江に相応しい「出雲神話と日本仏教」というテーマで発表が行われました。

日本印度学仏教学会は、昭和二十六（一九五一）年に宮本正尊東大教授を初代理事長として発足し、現在会員数約二三〇〇名を擁する、人文系の学会としては日本で最大規模の全国学会です。かつて中村先生は理事として貢献され、毎回研究発表をされた縁の深い学会です。韓国、中国、台湾、タイ、アメリカなどの海外の研究者も会員となっており、平成十四（二〇〇二）年には、ソウルの東国大学で学術大会が開催されたこともあります。しかし六十二年の歴史をもつこの学会で、かつて今まで、大学以外の、私どものような公益財団法人が学術大会の開催校となったことは一度もありませんでした。

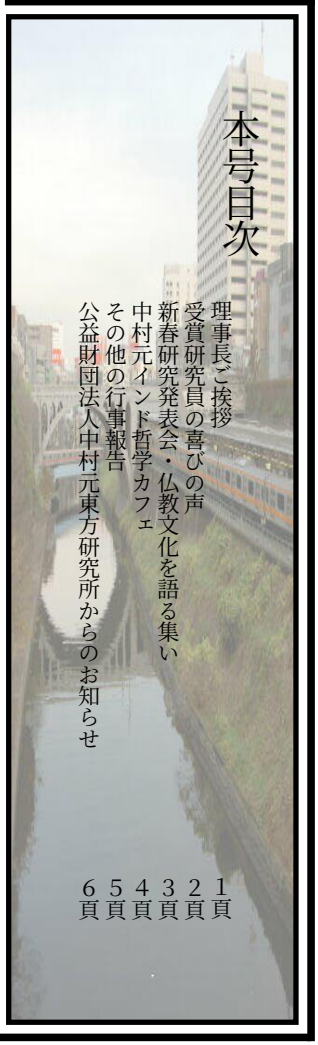
来年（二〇一四）はまた、七月十九日（土）と二十日（日）の二日間にわたって、ご生誕一〇〇年記念事業の掉尾を飾るものとして、比較思想学会の学術大会が中村元記念館で開催される予定になっております。

比較思想学会は、昭和四十九（一九七四）年に、日本における比較思想の開拓者であった中村先生を中心として成立し、現在、約七〇〇名の会員を有する全国学会で、今年、創立四〇周年を迎えました。

中村先生が、とりわけ、日本の哲学、思想研究については、専門領域の内に閉じ込もり、文献研究のみに陥りがちなことを強く懸念され、昭和六十三（一九八八）年に「奴隷の学問を乗り超えて」と題した特別講演を行われ、日本の学問領域におけるセクショナリズムを超えた研究の在り方の必要性を説かれ、「自主的な学問を進めよう」と呼びかけられた学会であります。

当中村元東方研究所では、すでに実行委員会が組織され、十ヶ月後に迫った学術大会の準備活動を開始しています。これら一連の諸記念事業が、先生の輝かしいご功績を顕彰し、その高邁な理想の実現に一歩でも、二歩でも向かうものであることを念願し、ひき続き、皆様方の温かいご理解と、ご協力と、ご支援をお願い申し上げて、ご挨拶といたします。

平成二十五（二〇一三）年一〇月一〇日



本号目次

理事長ご挨拶　1頁
受賞研究員の喜びの声　2頁
新春研究発表会・仏教文化を語る集い　3頁
中村元インド哲学カフェ　4頁
その他の行事報告　5頁
公益財団法人中村元東方研究所からのお知らせ　6頁

研究員の受賞相次ぐ　その喜びの声

「鈴木学術財団特別賞を受賞して」

田中 公明

日本印度学仏教学会理事長の斎藤明教授から、拙宅に電話があったのは松江の学術大会まであと二日に迫った八月二十九日の夕刻であった。斎藤教授からの連絡には悪い知らせが多い（ちなみに前回は、高崎直道先生の訃報）ので驚いたが、今回はよい知らせで拙著『インドにおける曼荼羅の成立と発展』（春秋社）が鈴木学術財団特別賞にノミネートされたから、三十一日の総会に出席するようにとの話であった。筆者の発表は九月一日の午前だったので、当日の朝一番のフライトで松江に行き、同日の夜行で帰京する予定だった。やむなくフライトを三十一日に変更し、急きょ松江に向かうことになった。

今回は、はじめて中村元東方研究所が当番校となり、中村先生の生誕地である松江で開催された学術大会である。そのため前田理事長をはじめ事務局員のご苦労はいかばかりかと察せられた。皆さんに代わって私だけが、このような栄誉に浴することは非常に心苦しいものがあった。同賞の創設に当たっては、鈴木大拙博士の愛弟子であった古田紹欽先生のお力があったと聞いている。私のネパール留学に際して、出光美術館から奨学金を出して頂いたのも古田先生である。今回の受賞に、前田理事長・斎藤教授をはじめ多くの方々のお力添えがあったのは言うまでもないが、中村・古田両先生の冥助もあったのではないかと思う。

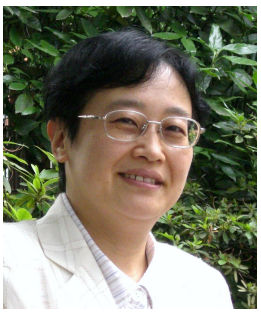
日本印度学仏教学会は、日本の人文系では最大級の学会である。しかし私たちの学界を巡る環境は、年々厳しさを増している。最近は、基礎研究を軽視し、すぐに社会の役に立つ応用研究ばかりがもて囃される風潮が世を覆っている。しかし応用研究の大プロジェクトでは、リーダーの社会的地位や集金力などがものを言う。これに対して地道な基礎研究は、研究者一人一人の熱意と努力こそが命である。私たち民間の研究所で働く研究者は、これからも地道な基礎研究を積み重ねてゆくべきだと考えている。

「第八回東海印度学仏教学会賞(学術賞)を受賞して」

佐久間 留理子

この度の受賞に際して様々なことを思い出します。私がはじめて印度学仏教学に興味をもったのは、大阪外国語大学でタイ語を専攻していた時です。その頃、故中村元博士がＮＨＫ市民大学講座において「東洋のこころ」と題し、インド等のアジアの宗教文化についてお話しをされていました。広汎な地域や時代を扱いながらも要点を押さえて分かり易く解説されていたのが印象的でした。それが契機の一つとなり、インドの宗教文化に関心をもつようになりました。そこで中村博士が翻訳されていた『ブッダの真理のことば　感興のことば』（岩波文庫）等を読み、大学でサンスクリット語やパーリ語を学びました。そして名古屋大学大学院に進学し、インドの宗教文化や美術等を本格的に勉強するようになりました。大学院では、アジア各地で絶大な信仰を集める観自在（観音）に興味をもつとともに、ヨーガ的行法の普遍性や多様性について理解を深めました。

今回の受賞対象は、「『インド密教の観自在研究』（山喜房仏書林）及びそれに関連する研究活動」ですが、それらには、観自在の図像学的研究、また密教的観想法（サーダナ）を幅広くヨーガという視点から捉えた研究、さらに観自在の説話研究が含まれています。一般に研究対象を捉える際には、微視的視点や巨視的視点がありますが、中村博士はそれら両方を兼ね備えておられました。「東洋のこころ」の名講義には、そのような複眼的視点が生かされていたように思います。今後私もこうした視点を忘れないようにしたいと思います。



最後に、大学時代に読んで感銘を受けたブッダの名言の一つをもって結語に代えたいと思います。「戦場において百万人に勝つよりも、唯だ一つの自己に克つ者こそ、じつに最上の勝利者である」（中村元博士訳『真理のことば（ダンマパダ）』より）

平成二十五年上半期　行事報告

新春研究発表会

鈴木研究員

斎藤教授

前田理事長

二月十八日（月）、東京都文京区の東京ガーデンパレス・高千穂の間において、毎年恒例の新春研究発表会が開催されました。

講演の部では、鈴木一馨研究員が、アジア諸国派遣留学の成果発表の一環として「中国福建省における風水の状況 -日本との関係を視点として-」と題する発表を行い、続いて、斎藤明東京大学大学院教授が、「観自在（Avalokite-Zvara）と『観音経』」と題する講演を行いました。

本年度の講演には約一〇〇名の参加者があり、会場は満席となりました。参加者は両先生の講演に真剣に聴き入り、メモを取るなど、熱気あふれる講演となりました。

講演に引き続きホテル内で会場を移して、前田専學理事長の挨拶、川崎信定筑波大学名誉教授による祝辞、原實東京大学名誉教授による乾杯に始まり、和やかな雰囲気の中、懇親会が開催されました。ご列席の三友健容立正大学教授、渡邊寶陽立正大学名誉教授、小野俊彦氏（日新製鋼相談役）、千綿道人氏（評議員）などが祝辞を述べ、盛会の中で幕を閉じました。

仏教文化を語る集い～『般若心経』でカフェ～

二〇一三年三月六日（水）に、名古屋市内にある建中寺（尾張徳川家菩提寺 浄土宗）にて開催されました。

まず、「あの人に会いたい」（故中村元先生出演NHK番組）が抜粋資料としてあげられ、中村先生のお人柄やものの考え方が紹介されました。

次に、佐藤宏宗研究員が、『般若心経』のサンスクリットと漢文の書かれた資料を配布し、「色（しき）」と「空（くう）」との関係などについて、その概要を分かり易く解説しました。また、インドの学者（Dash, Shoba Rani 先生）が朗読する『般若心経』のサンスクリットのテープを流し、かつてインドにおいて唱えられていたような原典の音声に触れて頂きました。

『般若心経』の最後に説かれるマントラ（大神呪）の「ガテー、ガテー」という言葉は、女性名詞「ガター」（行った女性）、すなわち、「般若波羅蜜（多）」への呼びかけのかたちであり、「般若（智慧）」は女神でもあると考えられています。現在のネパールなどでは、般若経典そのものが、礼拝対象として供養されるとともに、女神としても図像的に表現され、崇拝されていることが佐久間留理子研究員によって紹介されました。

参加者の方々からは、『歌舞伎俳優の市川團十郎さんの辞世の句「色（いろ）は空（そら）空は色との時なき世へ」は、『般若心経』と関係しているのか』という質問や、『能で用いられる般若の面は、なぜ恐ろしい顔をしているのか、女性の執念と関係しているのか』という質問などがありました。

今回の公開講座は、中部における初回ではありましたが、会場のほぼ満席となります二十六名にのぼる参加者があり、チャイ（インドのスパイス入りミルクティー）を楽しみつつ活気あふれる意見が交わされるなど皆様のお陰で幸先の良いスタートを切ることができました。

無断転載・複製を禁ず

編集・発行　公益財団法人中村元東方研究所

第八回 中村元インド哲学カフェ「ヨーガの世界 ～身体の治療法～」

平成二十五年一月十三日に大谷大学において、中村元インド哲学カフェ「ヨーガの世界～身体の治療法～」が開催されました。今回は、坐禅をする者の秘かな悩みである「痔」がテーマでした。

前半は、山口周子研究員が、七世紀半ば頃までにインドで成立したと推定される『療痔病経』（梵語原典は未発見、チベット語と漢訳が残る）を取り上げ、その内容や関連文献を紹介しました。この経典は、世尊がラージャグリハに滞在中、アーナンダより僧たちが痔疾に苦しめられていると聞き、この経典を用いるように勧め、教えを説くというものです。経典では、「痔」は、肛門にできるものだけではなく、眼や耳、背中や関節にできる疣や腫れ物のようなものも指しています。また、爪の甲等で痔を切取ってはならないと説かれ、痔病を治すためには、薬あるいは呪文を用いることが指示されています。この経典は日本にも伝わり、奈良時代に書写された記録があり、また平安時代の『医心方』にも、ほぼそのまま引用されています。さらに江戸末期には単独で刊行される一方、真言宗豊山派の僧、栄性（一七六八-一八三七）によって『療痔病経略賛』が記されています（参考文献：山中行雄他「仏教文献『療痔病経』とその関連文献について」『日本医史学雑誌』第五十七巻第三号所収）。

後半は、佐久間留理子研究員が、『療痔病経』にみられるように、医療と呪術がなぜ結びつくのか、また医療と呪術を分ける考え方にはどのようなものがあるのか、という点について説明しました。インドでは、紀元前のヴェーダの宗教の時代から、呪術を用いて災いを除き、福を招くことが行われてきました。また紀元後五世紀頃から密教が興隆し、仏教の中にも呪術的要素が多く取り込まれ、医療と結びつけられました。『療痔病経』は密教経典ではありませんが、大枠ではヴェーダ以来の呪術的な発想を受け継いでいると考えられます。一方、医療と呪術を分ける考え方は、西洋では早くから出現し、紀元前四～五世紀の古代ギリシャの医者ヒポクラテスにみとめられます（痔の治療法についても詳しい記述を残しています）。西洋と比べ、インドにおいて医療が呪術からなかなか抜け出ることができなかった原因の一つには、ヴェーダ以来の呪術に対する根強い信仰があったからではないかと思われます。

今回の公開講座には、インド伝統医療（アーユルヴェーダ）や看護学の専門家も出席され、活発な意見の交換がなされました。

第九回 中村元インド哲学カフェ「ヨーガの世界 ～生と死と～」

平成二十五年七月十四日に大谷大学において、第九回中村元インド哲学カフェ「ヨーガの世界～生と死と～」が開催されました。

前半の「生まれないために生きる～ジャイナ教における〈十二の観想／実修〉～」では、河崎豊氏（大谷大学助教）が、ジャイナ教の概説を行った後、十一～十二世紀頃に活躍したヘーマチャンドラ作『ヨーガ・シャーストラ』に説かれた十二種の実修法を紹介しました。この方法は、「輪廻」（＝苦）からの脱出を目的として、「世界は無常」であると思惟することから始め、「目覚め」が極めて得難いものであると感得することで終了します。この実修によって、人は「私のものである」という意識を離れ、あらゆる状況に対して平静となり、煩悩という火が消え去り、「目覚め」という灯明が輝くと説かれています。

後半の「臨床という場に接して」では、西岡秀爾研究員が、臨床の現場での経験に基づき、相談者（終末期を迎えている方々）と援助者との関わりやその問題点について報告しました。臨床における相談では、二つの立場を区別しなければならないと指摘されました。一つは、〈スピリチュアルケアの立場〉であり、「死んだら極楽に行けますか」と聞かれても、援助者はすぐに答えを提供せず、「あなた（相談者）はどう思われますか」と、問いを共有することから始めます。あくまで、「自分（相談者）」で価値体系を構築することが大切と考えられています。もう一つは、〈宗教的ケアの立場〉であり、援助者の信仰、信念、責任において答えを提供する立場とされます。参加者からは、「自分は、入院をした経験があるが、病状の重い時には、ものごとを冷静に考える余裕すらなかった」というご意見や「インドの宗教は、人生を否定的に考える傾向があるが、もっと人生を大いに活用しようという考え方はないのか」というご質問などがありました。

今回の公開研究部会講座は「生と死と」という人間存在の根源的テーマを扱ったこともあって、七十七名にのぼる多数の参加者があり、盛況のうちに終わりました。

無断転載・複製を禁ず

編集・発行　公益財団法人中村元東方研究所

行事報告

・五月十七日（金）
第八回佛教文化講演会
上野敬子研究員
「仏教の普遍的意義を考える
- 中村元の思想研究が明らかにしたもの」
吉村均研究員
「仏陀になるとは？
- インド・チベットの伝統から」
（於：高松市 法恩寺）

・五月二十六日（日）～
毎月第四日曜日・十三時半～十五時半
鶴岡八幡宮鶴岡文庫・東方学院共催講座
総合テーマ
「中村元『大乗の教え（上）』を読む」
（於：鶴岡八幡宮境内）

・八月三日（土）
第五回神儒仏合同講演会
「心の通いあいを求めて - イジメを考える」
神道 - 小林一成先生（太平山神社宮司）
儒学 - 謡口明先生（文教大学文学部教授）
仏教 - 神仁先生（全国青少年教化協議会主幹）
（於：神田明神祭務所ホール）

・九月十日（火）
第一回インド文化入門
「ヨーガへのいざない」（於：東別院会館）

・九月二十八日（土）・二十九日（日）
ナマステ・インディア二〇一三（セミナーハウスで講演）
的場裕子先生・山口泰司先生（東方学院講師）
佐々木一憲・高柳さつき・田中公明・奈良修一・林慶仁・吉村均 各研究員
（於：代々木公園）

研究員総会

七月九日（火）東京都千代田区にある学士会館において第七回研究員総会が開催されました。この総会は当研究所の更なる発展のため、研究員が一同に会し交流を深めつつ互いに意見交換を行うことを目的として企画されたものです。

当日は約三十名の研究員が出席し、前田理事長の挨拶に始まり、執行部より研究員に対する通達・要請事項が伝えられました。また、その後、研究会の運営などについて研究員間で活発な議論が交わされました。

中村元記念館

設立：２０１２年１０月１０日
博士生誕１００年に合わせ、
命日の１０月１０日に開館

場所：松江市八束支所 ２階
〒690-1493
島根県松江市八束町波入2060

３万冊に及ぶ蔵書や研究資料などが展示
故郷・松江を中村元研究の拠点に
東洋思想・文化の新たな発信地

会員参加へのお願い

公益財団法人中村元東方研究所からのお知らせ

当研究所では各種会員制度を設け、随時募集いたしております。会員には、機関誌『東方』をはじめとする各種情報の提供が受けられる普通会員と、当研究所への支援を主な目的とする賛助会員、ならびに維持会員がございます。

◇ 普通会員 ◇　年会費 ７千円

普通会員の皆様には、毎年一回発行される機関誌『東方』の他、当研究所主催の各種行事および会合等に関するご案内をお送りいたしております。

◇ 賛助会員・維持会員 ◇　賛助会費 １口 １万円 ・維持会員 １口 ５万円

当研究所では賛助会員ならびに維持会員を募集いたしております。当研究所の趣旨にご賛同頂ける皆様からのご協力をお待ちいたしております。なお、募金の趣旨をご理解の上、できうるかぎり複数口のお申し込みを賜りたく存じます。なお、当研究所は、内閣総理大臣から「公益財団法人」として認可を受けておりますので、ご寄付金額が２千円を超える場合には、その超えた金額が所得控除の対象となります。

＊ 詳細は公益財団法人中村元東方研究所事務局までお問い合わせください。

公益財団法人の認定

公益財団法人の申請が、昨年の平成24年6月27日付けで内閣府より認可されました。これに伴い、平成24年7月2日付けをもちまして、従来の「財団法人東方研究会」より「公益財団法人中村元東方研究所」へと名称を変更することになりました。

これはひとえに皆様方のご支援ご指導のたまものと衷心よりお礼を申し上げます。

これを機に中村元博士の創設の原点に立ち戻り、生きた学問としての東洋思想の研究およびその成果の普及に、より一層精進してゆく所存でございます。今後とも温かいご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

公益財団法人 中村元東方研究所
理　　事　　長　　前田專學
常　務　理　事　　奈良康明
常務理事・事務局長　　丸井　浩

（平成２５年４月１日付）

東方だより 第二十二号（平成二十五年十月十日）
編集／発行 公益財団法人中村元東方研究所
【事務局】〒一〇一-〇〇二一
千代田区外神田二-十七-二 延寿お茶の水ビル四階
TEL 〇三-三二五一-四〇八一

ホームページのご案内（ http://www.toho.or.jp ）

・当研究所の目的・理念・歩み
・中村元博士の略歴・業績・著作文献目録
・東方学院（開講科目、講師紹介、著書紹介）
・当研究所（研究成果、研究員紹介、著書紹介）
・公開講座、イベントのお知らせ
・リレーエッセイ
・チャットの広場
・パブリックリレーションズ　等

様々な情報が随時公開されていますので、是非ともご覧ください。